





## 参加者の声

分娩実習で赤ちゃんを取り上げたとき、妊婦役の人に「ありがとう」と言ってもらえて嬉しかったです。  
津野 桃里さん／自治医科大学(学生)

5年生なんですが、実習に向けて参加をしようと来ました。これからの実習で前に出ていけるような内容でした。  
岩内聰太郎さん／東京慈恵会医科大学(学生)

4分野の話を聞くことで、より自分の将来について深く考えられるようになりました。  
岡安 廉太さん／千葉大学(学生)

実習内容ももちろん楽しいですが、色んな人と産婦人科について語ることが出来るいい機会になりました。  
渡邊こころさん／東京慈恵会医科大学(学生)

産婦人科に対する情熱がすごいなと感じてぜひ将来そういう先生がいる科に進みたいと思いました。  
柿崎 結美さん／県立柏原病院(初期研修医)

男性医師による企画も充実しており、"男性からみた産婦人科"も十分に堪能できた濃い1泊2日でした。  
尾坂 真さん／杏林大学(学生)

産婦人科を希望する意識の高く、志のある同期や後輩と出会えたことが一番の収穫でした。  
入江 恭平さん／広島市民病院(初期研修医)

産科や婦人科の手技が多く体験でき、普段あまりできないようなことが出来たのが楽しかった。  
河井 啓一郎さん／名古屋第二赤十字病院(初期研修医)

# 第10回 産婦人科サマースクール in 美ヶ原 2016.8.6 Sat - 7 Sun SUMMER SCHOOL 2016

開催報告

第10回となるサマースクールには、236名の医学生と研修医が参加してくれました。今年は参加者に近い立場にある若手産婦人科医師が企画と運営を行い、新しい企画の一つとしてチーフター制を導入しました。参加者は5~6名のグループに分かれ、各グループに若手実行委員がチーフターとして加わり、全実習を親身に指導しました。

1 日目は分娩介助実習、超音波実習、CTG判読実習、NCPD(新生児蘇生)実習と産科領域の実習を行いました。分娩やNCPDなどのグループ実習では、徐々に参加者がどうし、チーフターとの距離も近くなり、息の合ったチームワークで実習を行うことができました。超音波実習では胎児計測や経腔超音波検査による診断に挑戦しました。実習で体と頭を十分に動かしたあとはお待ちかねの夕食懇親会です。懇親会は大変盛況であり、同年代の仲間や全国の産婦人科医との交流を深めることができたと思います。また今年もNST管弦樂團による素晴らしい演奏が懇親会を盛り上げ、産婦人科医によるパフォーマンスに参加者から驚嘆の声が上がりました。

夕食懇親会後の実習復習コースでは、胎児工芸に真剣に取り組む姿や分娩介助訓練人形を使って参加者どうし楽しく実習を行つ姿が印象的でした。また男性企画、女性企画、産婦人科の魅力企画、研修企画を各部屋に分かれて開催し、若手実行委員が各企画のポスターを提示しながら、参加者との意見交換を行いました。参加者にとって普段なかなか聞けないことを産婦人科医に聞くことができるよい機会になったようでした。

全文は日産婦HP内「産婦人科医への扉」に掲載中です。ぜひご覧ください！

2 日目は病理学実習と手術実習から開始しました。病理学実習では症例に即した形で鑑別診断や必要な検査などをグループで討論しました。手術実習では縫合やエナジーデバイスの体験、そして内視鏡にも触れ、グループ対抗のリレーでは大いに盛り上がりました。その後、国立成育医療センターの小澤克典先生、北海道大学の馬詰武先生に最前線の研究についてとても素敵なお話をいただきました。

お昼には若手医師によるランチョンセミナーが開催され、産婦人科の4本柱である「周産期」「腫瘍」「生殖」「ヘルスケア」それぞれの魅力について発表があり、産婦人科医のやりがいとは何なのかを感じ取っていただけたと思います。

最後にチーフターを中心に楽しそうに記念撮影が行われていったのがとても印象的でした。

## 日本産科婦人科学会公益事業 カンボジア工場労働者のための 子宮頸がんを入口とした 女性のヘルスケア向上プロジェクト

JICA草の根技術協力事業



カンボジアは内戦の影響で、未だ医学教育や診療体制の構築が十分とは言えない状況です。しかし、これまでに日本の産婦人科医の先生方がJICA母子保健事業に深く関わり継続的に支援を行つてこられた結果、Millennium Development Goal (MDG) 5A : Reduce the maternal mortality ratio by three quarters between 1990 and 2015を2015年に達成しました。そんなカンボジアで現在の大きな医療問題

一方で、カンボジアには子宮頸がんの予防のシステムが全く存在しないため、カンボジアの産婦人科の先生とともに、子宮頸がん検診による早期発見と前癌病変段階での早期治療の体制の構築を図つております。すでに本会の会員の先生方にはカンボジアに出向いていただき、現地で細胞診・コルポスコープ下生検・円錐切除の指導や診療体制の構築のお手伝いをしていただいております。

日本では当たり前の早期発見・早期治療のシステムがカンボジアでも機能して、多くの頸がん罹患を予防できる時代を早く迎えられるよう、今後も引き続き、当プロジェクトを推進して参ります。研修医の先生方や学生の皆さんも、今後ぜひ産婦人科トレーニングを積んでいただき、低医療資源国での医療の充実に向けた事業にご参加いたただければと思います。

▲全文はwebサイトに掲載しています。ぜひご覧ください！

## 研修医の声

研修医の方々に、産婦人科を選んだ理由や、  
産婦人科に寄せる夢を語って頂きました。

医学部に入った当初、子供や若い人に関わることをしたいと漠然と思っていましたが、特に産婦人科に興味はなく、授業や実習で産婦人科について知ることで少しづつ興味を持ち始めました。

産婦人科の授業で妊娠性温存についてグループで話しあう機会があり、それが産婦人科に興味を持つはじめの機会でした。

患者さんのその後の人生に大きく影響することであり、簡単に割り切れる問題ではないと思ったことを覚えています。

産婦人科の実習では、ある先生から言われた「子供からお母さんをいなくさせてはいけない」という一言がとても印象に残っています。やや語弊がある言い方ですが、そういうた気概をもって働く

のは素敵なことだと感じました。

その他にも産婦人科の魅力はたくさんあると思います。胎内にいる

ときから最期のときまでみる科は産婦人科しかありませんし、内科的管理から手術、化学療法、そして女性のヘルスケアまで幅広い分野を診療、研究できるのも産婦人科しかありません。今後とも初心を忘れず、患者さんと真摯に向き合える産婦人科医を目指して日々研鑽を積みたいと思います。

筑波大学医学医療系産科婦人科学・福本あすか

### 私と産婦人科

▶全文はWEBサイトに掲載しています。ぜひご覧ください！

となってきたのが子宮頸がん対策です。

日本産科婦人科学会は2012年度からカンボジア産婦人科学会(SUGO)との交流を開始いたしてお

り、2015年度からは工場労働女性を対象としたヘルスプロモーションと子宮頸がん検診の実施による早期発見・治療のための体制を実施しております。必ずしも健康意識の高くない工場労働女性に対して継続的な健康教育を行い、その中で子宮頸がん検診の重要性についての意識付けも行つております。

一方で、カンボジアには子宮頸がんの予防のシステムが全く存在しないため、カンボジアの産婦人科の先生とともに、子宮頸がん検診による早期発見と前癌病変段階での早期治療の体制の構築を図つております。すでに本会の会員の先生方にはカンボジアに出向いていただき、現地で細胞診・コルポスコープ下生検・円錐切除の指導や診療体制の構築のお手伝いをしていただいております。

私が産婦人科を志すきっかけになったのは、学生時代の臨床実習でした。学生の私でも、患者さんから必要とされ、感謝されたことに驚きました。担当した切迫早産の患者さんには、エコーを当てながら出産を楽しみな気持ちと長期入院の不安な気持ちを打ち明けられ、次の子は先生が1人前になら診てもらいたい、と言っていたのが印象的でした。1ヵ月の実習で、多くの出産に立会いましたが、出産の経過は患者さんそれぞれ違い、さまざまな手技も経験でき、毎日学ぶことばかりでした。責任が大きい分やりがいのあるこの仕事を、一生の仕事をしたいと思い、産婦人科を選択しました。

初期研修は産婦人科コースを選択し、1年目は1ヵ月半産婦人科をローテートしました。産科救急から癌のターミナルの患者さんまでさまざまな症例を経験し、多くの女性の人生に触れることができました。自分の未熟さを痛感することが多いですが、メリハリをつけて生き生きと仕事されている先生方の姿に憧れました。患者さんに寄り添い、必要とされる産婦人科医を目指して、日々の研修に励みたいと思います。

### 産婦人科を選んだ理由

